

車を解放南路沿いに置き、Z社長や友人たちと周囲の街並みを眺めながら、魯迅中路の方に左折する。「さすがに魯迅の生まれ故郷だけあって」と言いたいところであるが大連市にも解放路とか魯迅路という大通りがあり、大都市にはだいたいこれらの名前の付いた道路がある。中国政府は、中山路とともに大好きな名前なのであろう。自国の有名人にとどまらず大連市には、高爾基(ゴーリキー)路なんて大通りもある。

さて、紹興市はやはりいいところだなと思いながら歩いていると、なにやら臭いにおいが漂ってきた。そのうち強い臭気が変わってきた。Z社長が「休息一会儿(ちょっと一休みしよう)」と言ってテーブルを指さしながら店の中に入っていった。皆で座って待っていると、お皿に盛った厚揚げのようなものを店員が持ってきた。社長は、「これはここの名物です。召し上がってください」とニコニコしながら中国語で話しかけてきた。においを嗅ぐと鼻が曲がりそうな強烈なおいだ。

折角だからと勇気を振り絞って一口食べたが、二度と口にすまいと思った。これでは、クサヤも顔負けである。友人になんという食べ物か聞くと、「臭豆腐(チョウドーフ)」で中国では、有名な食べ物だというのである。私はここで初めて経験したが、確かに臭豆腐は旅行先でときどきお目にかかった。しかし以降、口にしていない。

帰国してネットで見ると、豆腐を発酵させた汁に漬け込んだものだという。保存食であろう。古来、湖南省の風土食が中国各地に伝播し、台湾にも外省人が持ち込んだものだそうだが台湾の臭豆腐も有名ならしい。

この店は早々に切り上げてまた歩き始めた。すると前方の看板が見えてきた。どこかで目にした文字である。その看板の文字は〈咸亨酒店〉である。そうだ、魯迅(1881年～1936年)の作品“孔乙己”の中に出てくる酒屋の名前だった、と思い出した。この作品を読んだのはずっと昔のことだが、なぜかこのお店の名前は頭の片隅にあった。みすぼら

しい身なりの孔乙己がふらっと出てきそうな雰囲気である。この看板を見てようやく魯迅の生まれ故郷に足を踏み入れた気がした。お酒や臭豆腐そして茴香豆など売っていたような気がするが、はっきりした記憶はない。なにしろこの日は国慶節の連休中で、観光客であふれかえり何かを買う気が起こらなかったからである。

まもなく「魯迅記念館」が見えてきた。この記念館は、「魯迅故居」、「三味書屋」(通っていた塾)、「陳列館」からなっている。魯迅故居は当時の様子がそのまま残されているようだ。平屋であるがなかなか立派な構えである。入り口は重厚な造りで、すこし威圧感を与えている。開放的な造りではない。間口はさほど広くはないが、奥行きはたっぷりである。実は、魯迅は富裕な地主だった「周家」の長男として育った。ご存知のとおり彼の本名は、周樹人で、ペンネームの魯迅の魯は母方の姓である。祖父は科挙における進士の称号も得ており、彼は将来の高級官僚が約束されていたようなものであったが、ある事件を境に周家は坂道を転がるように没落していく。この時の周囲の人たちの手のひらを返したような薄情さが幼少期の彼の人格形成に大きな影響を与え、作家としての原体験になったと思われる。

魯迅記念館周辺は、このあたりの一大観光スポットで土産物店やいくつかのレストランがあって人でごった返している。友人があれをやってもらおうよ、と指さす方を見ると陶芸店が観光客の写真を撮ってそれをマグカップに焼き付けている。見本をみると魯迅の大きな似顔絵が描いてある壁の前で撮った観光客の写真が焼き付けてある。それには撮影年月日、と「中国歴史文化名城・紹興」、「一輩子」、「一杯子」という赤色の文字まで入っている。これはいい記念になるなとすぐ列の最後に並んだ。〈紹興での一生の記念となるコップ〉ということか。写真を撮って15分くらいでできあがったが、値段はいくらだったか忘れてしまった。今は大切に本箱の中に置いて眺めている。

ここで魯迅の55年間の短い人生の中で日本と

の関わりを中心に振り返ってみたい。彼は16歳までここ紹興で過ごした。その後、南京、北京、杭州、広東、上海など各地に足跡を残している。また1902年(21歳)に官費留学生として日本に渡航した。1909年まで7年間も日本に滞在したのであるが、この間の彼を取り巻く状況や日本や中国の置かれた環境を見てみよう。

彼はまず弘文学院で日本語の勉強から始めた。そして1904年に仙台医学専門学校(後の東北大学医学部)に入学した。当初は医学の道を目指したのだ。きっかけは優れた父が重い病気になった時である。漢方医らのあやふやな治療で父が死亡したのである。漢方医と当時の中国の医学に不信を抱き、西洋医学を志したのである。この仙台で、彼は恩師と崇めることになる藤野厳九郎先生と出会う。藤野は日本語がまだ不自由な魯迅に対し、講義のノートの提出を求め、その都度きめ細かく添削するなど何くれとなく彼を支えた。小説「藤野先生」に詳しいが、先生のことを「わが師と仰ぐ人の中で、先生は最も私を感激させ、最も私を励ましてくれたひとりだ」と言っている。

「藤野先生」については私が大連勤務の際、週一回中国語教室に通っていた時、ある先生(大連外国語学院の学生)がこの小説の中国語版の資料を教材として用意して、数回勉強したことを懐かしく思い出す。その資料を見ると、メガネを掛け立派な口ひげを蓄えた藤野先生の写真や仙台医学専門学校の有名な階段教室、自筆の入学願書などの写真が掲載されている。この資料は、「魯迅経典全集」からのコピーであったが、どのくらいの中国人が読んでいるのだろうか、と思った。藤野先生のような日本人がいたということは私の心をホッとさせた。彼は医学者としてではなく、文学者として有名となったがそれは次のようなきっかけがあったからである。

魯迅は授業の中で、幻灯機で戦争に関するニュース映画を見るときがあった。それはロシア軍のスパイであった中国人が捕えられ、銃殺されるシーンであるがそれを見て喝采する同胞の姿を見て、中国人

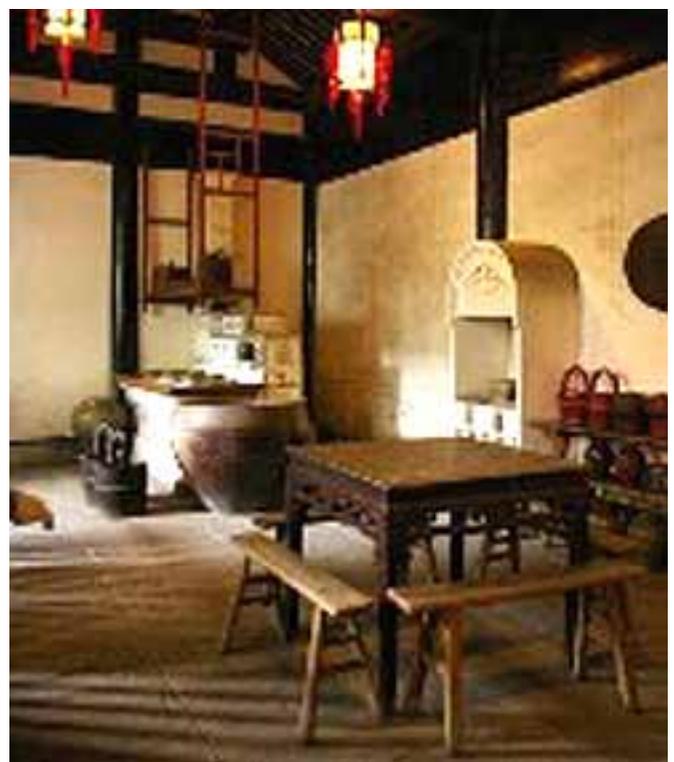
を救うのは医者ではなく、文学による精神の改造しかないとの危機感を持ったということである。そのため1906年1月には退学し、文学で中国人の精神を覚醒させようとした。退学後一度帰国し、母の決めた女性と結婚し、次弟の周作人と共にふたたび日本に戻った。したがって仙台での生活は1年半弱で終わったわけであるが、この時期に前号で書いたように秋瑾も1904年に日本に留学し、二人は東京で顔を合わせている。しかし翌年中国に戻った秋瑾は密告されて捕えられ1907年に処刑された。勿



魯迅



魯迅故居



室内

論彼は来日してから、母国の封建社会や清朝の卑屈な対外政策などに憤慨し、革命団体「光復会」の会員にもなり漢民族の復興のための諸活動も行って

いる。同時期に国(清朝)が、東方の小国と思っていた日本に日清戦争で敗れ、さらに1904年～05年の日露戦争では、自国の領土で関係のない他の国と国とが戦争をするという二重の屈辱も味わっている。日本での7年間は国も彼自身の周りも大きなうねりの中に置かれた。

1909年に帰国後文学革命、思想革命に先導的な役割を果たすべく活動を開始した。2年後に辛亥革命は起きて新しい世が到来すると思ったが、革命後の旧態依然たる現実に幻滅、思索を深める長い日々が続いた。それが中国人の本質を語る彼の代表的な作品を生む原動力ともなった。

1918年(37歳)には「狂人日記」を執筆、1921年(40歳)には「阿Q正伝」を発表した。ドイツ語も学び、古今東西の文化や文学にも通じ、東欧の文学の紹介もするなど鬼神のごとく働き、中国人の精神的覚醒に多大な貢献をしたのである。中国人が孫文とともに魯迅を尊敬するのはよくわかる。残念なのは55年という短い生涯であったことだ。

彼は、1927年(46歳)に上海に移り住み、ここで生涯を終えた。上海には立派な魯迅記念館があり、多くの方が彼の一生を偲んでいる。

さて紹興市に深く関わりのある偉人の紹介の最後となるが、「周恩来」を忘れるわけにはいかない。周恩来(1898年～1976年)は江蘇省の淮安市に生まれた。しかし、周家はもともと紹興市を祖籍とする旧家で祖父の代に淮安市に移っている。もしかしたら魯迅の周家とは遠い親戚かなと思った

りした。紹興市内には、地図を見れば魯迅記念館から北の

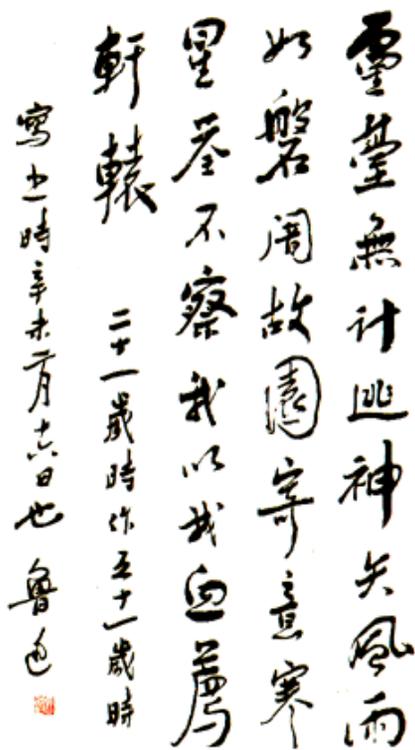
方角に「周恩来故居」が記載されている。いつ頃住んでいたのであろうか。彼の功績などは皆さんの方がご存知と思うので、ここでは周恩来の考え方、信念がわかる出来事を一つだけ書いて紹介にかえたい。

今年の3月頃、「星火方正」(方正友好交流の会・出版)という冊子を読む機会があった。方正は“ほうまさ”と読むが、これは宝清県という地名があり区別するため、このように読むことにしたそう。ハルピンの東に方正県はあるが、ここに日本人墓地がある。1945年ソ連が日ソ不可侵条約を一方向的に破棄し、この地域に侵攻した。その時にソ連軍の犠牲になった旧満州開拓団の方々約5000人の墓地である。この地方に住んでいた中国人の農民からすれば、自分たちの土地を横取りしたのだから自業自得と思っても仕方ないことであろうが、農民たちは開拓

民が寒さと飢えで次々と死者が出る中でまだ息のある者を各自の家に引き取り多くの命を助けている。その後周恩来総理は方正県政府に指示し、「方正地区日本人公墓」を造らせた。又、文化大革命の折に公墓が破壊されそうになったときには、「彼らも日本軍国主義の犠牲者であり、破壊してはならぬ」と止めさせたそう。よほど肝が据わった人でなければとも言えぬことである。このことを日本人は決して忘れてはならぬと思う。いつか機会があればこの地を訪問したい。

これまで紹興市が故郷の人や、縁の深い人を5人書いてきたが、魯迅の弟の周作人や政治家で教育家として有名な蔡元培は紹興の人であり、まだまだ紹介したい人は多い。彼らに共通するのは国を思う強い信念と行動力である。一般的には気候温暖で豊穡なところにはこのような人物はあまり出てこないのではないと思うが如何であろうか。私の偏見かもしれないな、と思いつつ紹興市の稿を終わりとしたい。

(おわり)



魯迅の書